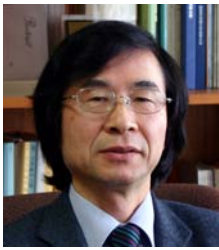


シリーズ「50 年後の国土への戦略」

日本文明が継続していくために



丸山久一
論説委員
長岡技術科学大学 教授

三浦雄一郎氏が 80 歳でエベレスト登頂を達成した。体力もさることながら、夢にかける精神力の強さに驚かされる。テレビの特集番組で知ったことだが、氏の脳組織は実年齢よりはるかに若く、特に、知的好奇心を司る前頭葉は活発に活動しているとのことであった。版画家の故棟方志功氏は、90 歳の折に向こう 30 年分の版画用木材を購入したという話も思い出し、夢を追求し続けることで生命力が高まることを改めて実感させられた。

150 年前あるいは 70 年前の社会の転換期には、“国家百年の計”という言葉で長期ビジョンが語られ、国の大きな基本が定められたと聞いている。ただ、彼らが 100 年先の姿を見ていたかどうかは定かではない。幸いなことに、手本とすべき目標はあったと言える。欧州であり、米国が追いつく姿であったのは確かである。それに比べ、現在の社会的な雰囲気には閉塞感がつきまとっている。少子高齢化の入り口に立って、将来を語る口調にはどうしても否定的な面が強調される傾向にある。

総務省の将来推計では、現在 1 億 2 千 7 百万人の人口は 30 年後に 1 億 4 百万人になり、2 千万人以上の人口減になると予想されている。この人口は 1970 年頃と同じである。その当時は、高度経済成長期にあり、大阪万博が開催されていて、国中は活気に溢れていた。種々の条件が異なるとはいえ、その気になれば同じような活気を生み出す人口ではあると言える。悲観的な見方をする方からは、人口構成比（人口ピラミッド）が大きく違うという意見がでるのは承知しているが、人々の活動を支えているエネルギーの供給状態も大きく違っていることを強調したい。

国土交通省の資料によれば、1970 年の消費電力は 3.2×10^3 億 kWh であったが、2006 年では 10.5×10^3 億 kWh と 3 倍以上になっている。指標は消費電力であるが、それに支える供給量が確保できているのは言うまでもない。ちなみに、2006 年の人口は現在とほぼ同じ 1 億 2 千 7 百万人強である。消費電力が国民の活力の直接的な指標とはならないものの、GDP で比較する

と、1970 年は 9,714 \$ / 人であったものが、2006 年では 22,000 \$ / 人となっている。

もう少し歴史を遡ると、1700 年頃から幕末までの 150 年間では、人口はほぼ 3,100 万人と一定で、GDP も 570 \$ / 人から 670 \$ / 人と僅かな増加でしかない。しかし、明治時代になると石炭によるエネルギーが飛躍的に増加し、1900 年頃は人口が 4,780 万人、GDP も 1,180 \$ / 人、さらに石油によるエネルギーの増加で、1940 年では人口が 7,311 万人、GDP は 2,874 \$ / 人と大きな伸びを示してきた。

エネルギーが増加することで、人々の活動範囲が広がり、機器類の使用等で一人当たりの生産量も格段に大きくなる。さらに、GDP でも示されるように、生活の質も大きく向上する。筆者にとっても、中学生であった 50 年前の暮らし、大学院生であった 40 年前、社会人となっていた 30 年前を思い出し、この 50 年間の生活の質を比較して、確かに向上してきていると実感できる。

歴史の展開は、決して予定調和的ではない。技術開発等に基づく価値観の変化や、社会的な動乱等により、時に大きな変化を生じる。しかし、より大きなエネルギーを確保することで、より多くの人々がより豊かな生活を享受できるのは確かなようである。このことは、50 年後の国土を考える際のキーではないかと考える。

経済学では、不確実な将来の収益を期待しつつ、現時点で確実な額の費用を投下する行為を投資と言う。投資にはある種の「賭け」の要素があり、新しい何かを生み出すという点では生産的な行為で、投資なしには経済は成長しないとされている。その際、あまりに豊富な情報は「やる気」を削ぐ危険もあるとのこと。不確実だからこそ“賭けてみたい”という気概が生まれる。この気概は、社会の活性化には必須である。

リスクは統計的に処理できるので、マネジメントが可能であるが、クライシスには対処するしかないと言う。東日本大震災を経験して、将にその通りであると実感している。では、50 年後の国土に対して、今何をすべきなのであろうか。一つには、これまでの延長上に将来があるという固定観念に拘らないことである。未来には不確実な要素があり、チャレンジングなことが多いという現実を再確認するとともに、技術的な面では、クライシスに対して幅広い対応ができるよう、基礎技術を伝承するとともに、新たな技術を開発するために、地道な努力をこれまでのように続けるしかないと思う。